

## 日本におけるエンカウンター・グループの特徴についての試論 —— 社会システム論の視点から ——

林 もも子

### I、はじめに

エンカウンター・グループは、1960年代にアメリカの臨床心理学者 Rogers, C. が開発した個人の心理的成長と対人関係の改善を目的とした集中的な小集団体験の技法である。Rogers (1970) は、エンカウンター・グループは、人格的独立、感情抑圧の減少、革新意欲の高揚、制度的硬直への反対などを目ざすものである、としている。集中的な小集団体験として形は似ているが、目的が異なる隣接領域として、治療を目的とする集団精神療法、対人関係の訓練を目的とする Tグループなどがある。

エンカウンター・グループの対象は一般の人々である。臨床心理学の専門家がスタッフとしてエンカウンター・グループの企画を立てて呼び掛ける。その公募に自発的に応じた参加者 6 人から 10 数人程度のメンバーからなる小グループに 1 人ないし 2 人の「ファシリテーター」と呼ばれるスタッフが加わる。参加者は「参加費」として、企画期間中の宿泊、食費などを自己負担すると共に、スタッフの宿泊、食費および少額の謝礼などを共同で負担する。

日本においてはほぼ 2 泊 3 日から 4 泊 5 日程度の合宿形式で行われる。アメリカでは一週間から 10 日の企画もある。「セッション」と呼ばれる、テーマなどを特定しない話し合いの時間を 1 時間半から 3 時間の枠として設け、一日 2 から 5 セッションのプログラムを作り、話し合いを重ねる。

同時に複数の小グループを進行させる形もしばしば行われる。小グループのメンバーは最初に決定された後は固定して同じ顔ぶれで全日程を過ごす。メンバーは全日程参加が条件である。

ファシリテーターはメンバーが心理的な損傷を受けないように配慮し、グループに信頼と安全の風土を醸成し、自由な話し合いを促進するが、特定の方向に話し合いをリードしたりはしない。スタッフは、臨床心理関係の職業の人が多く、Rogers は、臨床心理の専門家と規定していない。臨床心理以外の職業の人がエンカウンター・グループに複数回参加するうちにスタッフとなる場合もある。

アメリカでは 1970 年代にエンカウンター・グループが爆発的に流行し、そのため、「エンカウンター・グループ」の名称で様々な心理学的手法を不適切に用いる「破壊的カルト」(Hassan, S, 1988) 的なグループも生まれ、他国へも広がり、心理損傷などが問題となった (Sodaro, E. R., 1974, Powell, C., 1979, Sale, I. et. al., 1980)。日本においても 1980 年代に「自己啓発セミナー」などの名称で同様の破壊的な心理療法カルトが一部マスコミにも取り上げられた。現在もそのいくつかは活動している。しかし、本論でとりあげるエンカウンター・グループは、営利を目的としない、臨床心理学の一技法としてのエンカウンター・グループである。

著者は臨床心理学を専門とするものだが、「文明としてのイエ社会」(1979) という、日本社会についての経済学・政治学・システム理論学者の共著に触れ、日本社会におけるエンカウンター・グループの特徴について考える契機を得た。この本は、日本社会の近代化の特徴について、社会システムとして独特の歴史を持つ日本の「イエ社会」を他の社会システムと比較し、相対化して論じたものである。その視点は歴史的にも学問的にも幅広く、集団について考える端緒を豊富に提供している。本論では、この本の一部である社会システム論の視点に照らして、エンカウンター・グループの再定義を試み、これに基づいて現代の日本におけるエンカウンター・グループの特徴を試論的に考察する。

## II、社会システム論における「集団」としてのエンカウンター・グループ

まず、社会システム論における「集団」の定義によってエンカウンター・グループを再定義する。「文明としてのイエ社会」では、従来の西欧的観点からの「集団」の定義を相対化するために、西欧社会と東欧社会を個人主義と集団主義の観点から論じた上で、「集団」を再定義している。以下にこれを要約して紹介する。

### 1、社会システム論における「集団」

#### (1) 個人主義社会と集団主義社会

人間は「個別的」であると共に「集会的」な存在である。人間には個別性と集合性の二つの契機がある。人々の認識活動がそれぞれに重点をおく対象化の方向としては、自己の対象化と間柄の対象化とがある。

西欧の価値観ないし文化は前者の方向に対象化を行った。「自己」は「他者」と対立する事によってのみ「自己」となりうるが、無数の他者が間柄の中に現れては消えていくとき、「自己」は完成しない。完全な「他者」は自己と交流可能でありながら自己とは完全に異質であり断絶していなければならない。従って、最も徹底した「自己の対象化」あるいは「個人」概念の確立は、ユダヤ＝キリスト教におけるような絶対的他者としての人格神の概念を経て初めて実現した。

一方、東方型有史宗教は間柄の対象化の方向をとった。儒教は祭や楽や礼という形で、間柄を理想化しつつ対象化した。その他、「五倫」「和」「仁」「慈悲」「梵」などは完全な間柄の概念にあたるが、それらと現実の「間柄」の距離は余りにも大きい。完全な「自己」が現実の生物的個体（人）によって担われざるをえないのに対して完全な「間柄」がいかなる現実の集まりないし集団によって担われるべきかはつねに不確かである。従って個人主義の型は一通りで絶対的であるのに対し、間柄主義の型は無数にあり相対的である。

しかし、たまたまある社会で一定の社会類型が十分長期にわたって自立的な形で存続する時、間柄の対象化はそれだけ進行しやすい。日本では「イエ集団」とよばれる一定の類型が一千年近く存続した（「イエ集団」の定義は本論文の主旨に直接関連しないので、省略する）。従って日本では「間柄」がそれ自体として意識される度合いが強く、対象化されている。

それぞれの対象化の方向の延長線上に、個人主義と、集団主義ないしは間柄主義とが出現する。ただし、個人主義においても集団主義においても、始源的な二つの契機（個別性と集団性）は依然として共に残存し、機能している。

#### (2) 集団の定義

「集団」という語は、従来「個人」が確立した後に成立する個人の集合体として考えられてきたが、これは、個人主義の社会である近代欧米型の見方である。日本社会のような集団主義ないしは間柄主義の社会においては、「個人」は確立しているとは必ずしも言えない。そこで、「主体」とみなしうるような人々の集まりを「集団」とよぶ。

主体とは、認識・評価・行為について一定の独自のルールないしパターンをもつ存在であり、また、自らの目的のために適切な行為を一貫して選択しているとみなしうる存在である。一般論的には他の人々から切り離された「個人」は必ずしも「主体」としての資格を十分にもつわけではない。それに比べればある種の個人の「集まり」の方が、はるかによく目的と行動の一貫性を示し、個人個人もその集まりに組み入れられる事によって初めて自らの一貫性を維持しうることもありうる。そのように「主体」とみなしうるような人々の集まりを「集団」と呼ぶのである。

次に、「社会システム」とは、個々の人々あるいは主体が何らかの形で集まっており、連結されているものである。この社会システムの中で主体システムが「集団」であり、非主体システムは「社会ゲーム」と呼ぶ。社会ゲームの例としては市場システムや投票システムがある。

「集団」と単なる人々の集まりの違いは、社会学においては、次の2点であるとされる。

## A、集合目標の共有

主体である事の必要条件は第一に一貫した評価体系をもっていることであるが、そのためには集合目標が共有されていなければならない。

ここでいう「集合目標」は十分に概念化され一元化されていなくてもよいものとする。成員が目標と呼んでもよいある種の心象、「活動を通じて実現をめざす将来の事態」のイメージを共有しているという事である。

## B、役割体系の存在

目標が共有されたとしても、それを実現するはずの各成員の認識や行動がばらばらだと集団は持続しえない。主体である事の第二の必要条件は認識と実行とが全体として整合していることである。成員の認識や行動が、時には衝突があるとしても平均的には、相互に補完しあい、その意味で協働関係になければならない。安定した協働関係は、成員が共同に認知し支持し互いに期待し合うような活動のシステム、つまり役割体系の形をとる。この役割体系とは、特殊化された役割の分業を必ずしも必要とせず、成文化された権限規定に基づく厳密なものばかりではなく、集団成員の間で事実上了解され維持されているものを広く含む。

## 2、「集団」としてのエンカウンター・グループ

以上のような、社会システム論における「集団」の定義に基づいてエンカウンター・グループを記述する。

### (1) エンカウンター・グループの集合目標

エンカウンター・グループの集合目標は、個人の成長、個人間のコミュニケーションおよび対人関係の発展との改善 (Rogers, 1970) である。これはかなり漠然とした目標と言えよう。

日本での具体的な呼び掛け文の例をあげる。日本で最も歴史が古く、規模の大きいエンカウンター・グループ主催団体である人間関係研究会のプログラムには「人間性の回復と人間関係の改善」「真の自己と出会い、一人ひとりが人間的に成長すること。いきいきとした人間関係と人間的な組織やコミュニティをめざすこと」との目的がかかげられている。また、ある大学のカウンセリング・センターの主催するエンカウンター・グループの呼び掛け文は「自然の中の静かな環境に身を置き、ゆったりとした雰囲気の中、グループでそれぞれ感じたことを自由に話し合ってみませんか？ 自発的な話し合いを通して、参加者のみなさんの自己理解が深まり、相互の出会いと心の交流が生まれるよう願っています」とある。「人間性」「自己」「成長」「出会い」などの漠然とした言葉が集合目標となっている。その前提となっているのは、参加しようとする人々の現実ないし日常は「非人間的」で「自己疎外」され「停滞」していて他者と「出会えない」という仮説である。ここに仮定されている人々の現実、近代産業社会の特徴であると考えられる。Rogers (1970) は、孤立と疎外の感じは、高度に工業化された文化圏の大きな特徴であり、エンカウンター・グループの経験は、部分的にせよ、この孤立感を救う、と述べている。この点についてはⅢの1で改めて考えてみたい。

### (2) エンカウンター・グループの役割体系

次に、エンカウンター・グループの役割体系とはどのようなものであろうか。最初にも述べたように、エンカウンター・グループにおいては、ファシリテーターと呼ばれるスタッフが、心理損傷の予防、グループの信頼と安全の風土の醸成、自由な話し合いの促進などの役割をもってグループに参加する。一方、メンバーは、自発的に自己表現をするという役割を持ってグループに参加する。

エンカウンター・グループが隣接領域の集団精神療法やTグループなどの小集団技法と異なるのは、スタッフが上記のような役割をになう一方で、メンバーと対等な「一人の人間」として全人格的に参加するという基本的な態度を持っている事である。ちなみに集団精神療法のリーダーは、治療者という役割を、Tグループのリーダーは訓練者という役割をになう、メンバーとは明確に異なる「専門家」として参加する。エンカウンター・グループでは、「リーダーシップの分散」(安部、1982、下田、1988)と言われるように、グループ・プロセスを通じて徐々にファシリテーターとメンバーが対等にリーダーシップを取る役割体系ができていく。

以上は小グループ内の役割体系である。小グループ外には次のような役割がある。まず、エンカウンター・グループの企画を広報し、参加者を募集し、会場を設定し、金銭管理をするなどの、「事務局」と呼ばれる役割がある。この事務局は、ファシリテーターが兼ねる場合もある。その他、全てのエンカウンター・グループに共通する役割ではないが、「コミュニティー・スタッフ」「オーガナイザー」「保育担当」などの役割もある。「コミュニティー・スタッフ」「オーガナイザー」は、2グループ以上の規模の企画の場合に、グループ・セッションには入らないが合宿に参加して全体グループと関わる役割である。また「保育担当」は、子供の保育サービスをしているエンカウンター・グループにおいてセッション中の子供の保育を行う。これらのグループ外の役割の意味についてもⅢの1で改めて論じる。

### Ⅲ、集団分類とエンカウンター・グループの位置づけ

次に、集団の分類の視点からエンカウンター・グループを位置付け、日本のエンカウンター・グループの特徴を検討する。まず、「文明としてのイエ社会」における集団の3つの分類軸を紹介しながら、それぞれの軸について、エンカウンター・グループを位置付け、再定義する。これらの分類軸は、集団の定義を手掛かりとして立てられている。さらに、これらの軸の交差との関連で日本のエンカウンター・グループの特徴を考察する。

#### 1、「手段的」対「即自的ないし表出的」分類軸

「手段的」対「即自的ないし表出的」分類軸は、集団の定義において、「役割体系」と呼んだ相互作用システムの性格による分類である。

パーソンズの行為理論(1951)によると、個人の行為は全て以下の二つに分けられる。

「即自的(consummatory)ないし表出的(expressive)な行為」：行為それ自体に満足ないし価値実現を求める行為。典型例として感覚的快楽追求、親子・友人間の愛情の表現、宗教的献身などがある。

「手段的(instrumental)行為」：目標達成のための手段として行われる行為。典型例として収入のためだけの労働、将来のための投資などいわゆる資本主義システムの根幹をなす行為がある。

さらに、目標ないし価値基準には各個人の個別目標と集団のもつ集合目標があり、それにより、手段的行為・即自的行為ともに個人的なそれと、集団的なそれとに分けることができる。

しかし、少なくとも相当規模の集団では、集合目標を達成するための手段的行為は事実上不可欠であって、分業や協働や指令や報告などの手段的相互作用なしには変動する環境の下で集団は持続し得ない。表出的関心の優越する集団は、身近な血縁関係、友人関係、特殊な指導者＝被指導者関係以外にはほとんど見あたらない。

手段的相互作用の優越性が見逃がされがちであるのは、集団が安定した環境の下で持続すると、手段と目標との間の因果的対応関係が経験的に一对一の形に収束し、手段的行為が集合目標への帰依を示す表出的行為として理解されるようになって両者が一体化したり、元来即自的になされていた行為が、事実として手段的意味を持つものだけに淘汰されていったりするからである。これを「社会システムの物化傾向」と呼ぶ。

現在の「産業社会」は人類史上最も変動の激しい社会であり、そこでは手段的行為と即自的行為の乖離は人類史に他に例をみないほどに明瞭である。

個人主義文化のもとで、企業や結社などの近代的集団が手段志向的であることは常識である。しかし集団主義文化の下でも、大部分の集団は手段志向的である。

エンカウンター・グループは、この分類軸に基づくと、「即自的あるいは表出的集団」である。先に述べたエンカウンター・グループの集合目的である「人間性の回復」「真の自己との出会い」「成長」などは、産業社会において即自的行為と乖離した手段的行為が優位である現実における即自的行為への希求と言い換える

事ができるのではなかろうか。エンカウンター・グループに生じる現象を記述した、Rogers (1970) の「あるがままの自分を受容する」「感情を直接表現する」、畠瀬 (1977) の「情緒性の再確認」などは、まさに即自的行為の描写である。

さらに、ファシリテーターの促進的な態度であるとされる「感情および認知の両面を伴う全人間が参加する」(Rogers, 1970)「自己の実存をグループに自由に供する」(畠瀬, 1977)という態度も即自的行為と考えられる。

ここで、重要なのは、「相当規模の集団で変動する環境の下では手段的行為なしに集団は持続し得ない」という点である。この視点からみると、先述した小グループ外の事務局や保育担当のスタッフの役割の意味は、小グループ内における即自的行為を可能にするために、環境の変動を最小限にとどめ、手段的行為を担うところにあると言えよう。また、コミュニティー・スタッフやオーガナイザーも、小グループの外にあって、例えば、小グループ内で強いストレスをうけているメンバーの緩衝剤としての機能を果たす、あるいは、ファシリテーターどうしの葛藤の相談役になる、というような、事務局などとは異なる形の手段的機能をになう事により、やはり小グループ内におけるメンバーやファシリテーターの即自的行為を保証していると考えられる。

従って、小グループの中でファシリテーターとメンバーが対等な役割関係を築き、ファシリテーターが十分に即自的行為ができるためには、手段的行為を行う事務局その他、小グループ外の役割は、ファシリテーターと分離して別の人が担う事が望ましいと言えよう。

また、エンカウンター・グループが「文化的孤島」(畠瀬, 1977)で集中的な合宿形式で行われるのも、エンカウンター・グループが行われている間の環境の変動を最小限にとどめて即自性を保証するためであると考えられる。

さらに、「エンカウンター・グループ」の名の下に一週間に一度セッションを持つというような間欠的な継続グループも広く行われている。しかし、このようなグループは当然環境の変動の影響を受けざるを得ないため、即自的集団とはいささか異なった質のものになっていると考えられる。このようなグループは、「居場所」「仲間」、帰属集団としての機能をもつ集団であると考えられる。

エンカウンター・グループの目的の一つを即自性の希求と定義するならば、その本来の形は、集中的な合宿形式で行い、ファシリテーターは小グループ内の活動に専念する役割を取るという形であると言えよう。

## 2、「限定的」対「無限定的」分類軸

「限定的」対「無限定的」分類軸は、集団の定義における「集合目標」の性質による分類である。

人間の抱く目標は最も広く言えば存続ないし発展であろうが、その中には無数の下位目標がある。その分化は人々の世界認識に依存して様々の形を取りうるが、いずれにせよ下位目標群のうちの一つあるいは一部分をめざす時、目標が「限定的 (specific)」であるとする。それに対して、存続とか発展としかいいようのない茫漠としたものを目指すときに目標が「無限定的 (diffuse)」であるとする。無限定的な集合目標とは、共同生活の安定、集団の存続ないし発展であって、集団の成員の生活の全般に関連する。それに対して限定的な集合目標を持つ集団の例は、企業や軍隊などであって、標準的理解ではそれらは一つの限定的目標のみをめざす「単機能集団」である。しかし実際には相当の期間にわたって存続する集団が、完全に単機能的である事は難しく、企業でさえも、単なる利潤拡大ではなく、一つの集団としての安定や発展をめざす多機能性を持ち、限定的と無限定的の中間に位置する。この意味で、限定的か無限定的かは程度の問題である。

個人主義的観点からすれば、各個人は個性的であるべきであって、彼らの生活全般にわたる姿勢は当然ながらそれぞれ異質であり、共有しうる集合目標は限定的たらしざるをえない。他方、集団主義の観点からして、個々の人々の生存の根拠を集団に求めるとすれば、集団の目標は成員の生活全般を牽引する無限定的なものとなる。従ってある集団が集団主義的性格を持つか個人主義的性格をもつかの判定は、その集合目標が無限定的か否かの基準による事が最も適当であると思われる。ただし、集団を構成要素とする、より上位の集団

についてはその限りではない。上位集団の集合目標が限定的であったとしても、それは下位集団そのものが集団主義的である事を妨げない。

エンカウンター・グループを以上の分類軸の視点から見ると、その目標は個人の成長であり、対人関係の改善であり、そういう意味で本来限定的である。Rogers (1970) がエンカウンター・グループが目指すものとして描いている人間像は、次のようなものである。

周囲の条件つきの肯定により形成されてきた偽りの自己（殻などと呼ばれる）から開放されて真の自己を発見して、あるがままの自己を受容し、自分や世界への信頼感を得る。感情的な抑圧が減少し、人格的に独立し、変化を恐れず、真実の人間関係を持てるようになる。

ここに記述されているのは、主体としての個人の確立としての個人の経験であり変化であると考ええる。

しかし、日本のエンカウンター・グループにおいては、参加者の事後の感想の中でグループの「間柄」に対する感想がしばしば見られる。たとえば「暖かい雰囲気がよかった」「みんながもっとパーティーに積極的に関与しなかったのがさびしかった」「みんないい顔をしているなあと思う。自分も今いい顔をしているだろうと思う。」などである。すなわち、日本においては、即自的集団の「間柄」を体験する、という茫漠とした無限定的な目標が暗黙のうちにあってはならないだろうか。

また、東山 (1992) の「原始エンカウンター・グループ」は、期間は限定しつつ、まさに成員の生活全般を牽引するコミュニティを作っている。これはかなり無限定的な集団であるという意味で、日本的なエンカウンター・グループの例であると考ええる。

さらに、小柳 (1990) はエンカウンター・グループの意義を「充実した無為を楽しむ」「人から反応をもらう」「人と知り合う」場、としているが、これは、Rogers の言う「親密で真実な関係」という「個人」と「個人」の関係とはいささかニュアンスの異なる「間柄」の記述であるように思われる。

欧米のエンカウンター・グループに参加した経験がないので、欧米のエンカウンター・グループの実態について論じることにはできないが、少なくとも集団主義社会である日本のエンカウンター・グループの目標は、即自的集団の「間柄」を体験するというかなり無限定的なものではないかと考える。

### 3、「人為的」対「自然的」分類軸

「人為的」対「自然的」分類軸は、集団の成立事情ないし存立根拠に関わる分類である。

集団の成立事情と存立根拠を混同してはならない。成立事情を検討すれば、純粋な意味で自然発生的な集団はほとんどありえない。子供の誕生による家族の形成にしても結婚はおそらく一つの選択の結果である。集団のそもそもの創始ないし生成は重大には違いないが、より重大な問題は、つねに成員の参加と脱退とを規制して、集団としての同一性を保っていくことである。その、成員の参加資格を判定する基準を支えるのが集団の存立根拠の論理である。

存立根拠が、個々の人間の選択を越えた生得的といってよい属性に基づいている集団を「自然的」と呼ぶ。存立根拠が、個々の人間にとって拒否もできるし承認もできるような選択を許すものである集団を「人為的」と呼ぶ。人為的集団において存立根拠の具体的内容は、「集合目標」についての合意である。

「自然的」集団としては、血縁集団、地縁集団、言語・文化・規範などの共同によって生ずる集団、たとえばいわゆる国民国家などが典型的である。しかし、地縁集団においても、移動が大幅に行われるようになると、地縁集団への参加ないし脱退は選択可能となり、自然性は失われていく。

「人為的」集団は、産業化以降においては、近代的企業、政党、利害団体、愛好者団体など枚挙にいとまがない。しかし、長期間にわたってある集団に参加していると、その集団での経験が蓄積されて動かしがたいものとなり、それからの脱退が困難になり、人為的性格が弱まることもあり、日本のイエ型企業はその典型である。

集団の自然的ないし人為的性格も相対的なものである。

エンカウンター・グループは、以上の分類軸の視点から見ると、企画を呼び掛ける人がいて、その企画に自発的・選択的に参加する人が集まって成り立つものであるから、人為的集団であるという事に異論はないだろうと思われる。

先述した一週間に一度ないし一月に一度というような間欠的な継続グループは、長期にわたる時、自然的集団に近いものとなると考えられる。例えば、エンカウンター・グループの人為性と地縁がたくみに結びついて、組織が物化せずに継続している例が福岡人間関係研究会のネットワークに見られる。(村山、1994)

以上のように「集団」の3分類軸にそってエンカウンター・グループを再定義すれば、エンカウンター・グループとは即自的・限定的・人為的集団である。ただし、日本においては、即自的・無限定的・人為的集団である。

#### 4、分類軸の交差

従来の集団分類(テニス、マキーパー、パーソンズら)は、近代と前近代を対比させ、その中では、3分類軸が事実上一致するかのように考えられてきた。すなわち、近代的集団が手段的・限定的・人為的であるのに対して、前近代集団は、即自的・無限定的・自然的であるかのように思われてきた。しかし、そのような前近代の理解は、近代についてのおそらく不当な自負と、前近代への根拠なきあこがれとの奇妙な混合物にすぎない。

3分類軸は異なった原則に基づく異なった分類である。

手段的・即自的の分類軸は、他の二軸とはかなり異なる。ほとんど全ての相当規模の集団は、手段的相互作用に基づかざるを得ない。近代社会は二つの型の行為があまりにも分離し、手段的行為が社会変化の主要な動因となっているという意味で歴史的に極めて特異である。前近代社会はそれぞれ二つの行為をむすびつける工夫を持っていた。今後の脱近代社会においても手段的行為を成員に期待せざるをえない。愛と親和と一体感がみなぎり喜びのあふれる「共同体」神話は克服されねばならないだろう。

問題なのは、限定的・無限定的の分類軸と、人為的・自然的の分類軸のくいちがいである。個人主義的価値観を前提にすれば、個人に選択の自由がある限り、彼は自分の個性を発揮しようとする限定的集団を選ぶはずである。自分の生活のすべての面をゆだねてしかも自分の個性を発揮しようとする集団は考えられない。従って個人主義文化の下では、人為的集団は限定的集団、無限的集団は自然的集団とみなされる。

しかし、集団主義的な価値観の下では、人々は自らの選択で、つねに無限定的集団を編成し、参加しようとつとめる。つまり人為的集団は無限定的である。たとえば日本のイエ型集団や、ヨーロッパ中世農村の基本単位である「全き家」(ゲマインシャフトであると同時にゲゼルシャフトであったとされる)がこれに該当する。

個人主義的価値観の下では、無限定的かつ自然的集団(共同体ないしは原共同体と呼びうる)が前近代、限定的かつ人為的集団(組織と呼びうる)が近代として対置される。しかし、集団主義的価値観の下では、「原共同体」崩壊の後に人為的かつ無限定的な集団が成立する可能性がある。これは「共同体的組織」と呼ぶ事ができよう。

日本におけるエンカウンター・グループは、即自的・無限定的・人為的集団であるとした。これは、集団主義的価値観の下での近代的集団でありながら、即自的であるという一点において、企業、家庭などのある程度以上の継続性を持つ集団と異なる、と位置づけられる。アメリカにおけるエンカウンター・グループは、即自的・限定的・人為的集団である。これは、個人主義的社会における近代的集団であり、やはり即自的である点が、ある程度以上の継続性を持つ他の集団と異なる、と位置づけられよう。これを言い換えると、日本のエンカウンター・グループが目指したものは、集団の即自性の回復であり、アメリカのエンカウンター・グループが目指したものは、個人の即自性の回復である。

いずれにしても、即自性の希求がエンカウンター・グループの他の集団と異なる本質的な特徴であると言

えるのではなかろうか。

#### IV、即自性

エンカウンター・グループを社会システム論により、即自的・無限定的・人為的集団（日本）、即自的・限定的・人為的集団（アメリカ）と定義し、近代社会における他の集団との違いはその即自性の希求にあると考えた。この即自性という事についてさらに考えてみたい。

小柳（1990）は、脱産業化社会論によってエンカウンター・グループの社会的意義を説明しようとしている。脱産業化社会は、豊かさの帰結としておのずと即自化する、という小柳の主張には異論が無い。しかし、小柳は、その即自化が同時に自己探求であり、変動する社会への適応を促進する工夫であると論じているが、その点に関して、再び「文明としてのイエ社会」の視点では別の見方が提起されている。「産業化の帰結」として論じられているところをかいつまんで紹介したい。

産業化の帰結の一つに「個別化」がある。個別化とは、人々が自分自身の事情のみを引照して行動することであり、行動上・現象的な個人主義化である。これは、自己に究極の価値を信じる「個人主義」とは異なる。個人は生存の脅威から解放され、規制の束縛から自由となり、知識の欠乏に苦しむこともなく、個別化の道を歩まざるをえない。個人はいわば、自分自身の中に投げ返され、感性や生命以外の物を見いだし得なくなろうとしている。最後の隠れ家となるのは、最小の親密圏としての核家族・夫婦・性的友人である。その最小圏に視野を限定して、自我の輪郭を描き直そうとする姿勢を「私化 privatization」と呼べよう。

エンカウンター・グループにおける即自性の希求は、本来、Rogers がめざした所と言えば、自己に究極の価値を信じるという個人主義的な「真の自己」の確認であったと考える。しかし、集団主義的な日本のエンカウンター・グループにおける自己の探求が、にわかに個人主義的なそれと等しいものとなりえたのだろうか。「個別化」ととどまっている可能性はないだろうか。日本において探求され、発見される「自己」は実は、他の集団と異なる新しいエンカウンター・グループという「間柄」における「自己」であり、だからこそそのような間柄を求めてエンカウンター・グループにくり返し参加する人々が出てきたり、エンカウンター・グループの再会の場を日常化するという現象が生じたのではないだろうか。一方、Rogers (1970) も、同様にエンカウンター・グループにくり返し参加しつづける人について記述している。これは、推測でしかないが、個人主義の国アメリカ、とくに地縁などの自然的集団が薄く、人種のるつぼであるアメリカにおいて、エンカウンター・グループが当初の Rogers の意図とは別に、集合的契機を刺激した事が1970年代の大流行につながったのかもしれないとも考える。

さらに、小柳の論から5年を経て、日本はバブルの崩壊、一部での終身雇用制から年俸制への変化、雇用の縮小など、かなりの変動を経験して来ているが、エンカウンター・グループの参加者は、筆者の知る限り、全体としてとくに増加の気配をみせてはいない。もちろん不況により経済的な余裕がないためという理由もあるだろう。しかし、果たして、社会の変動に適応していく鍵がエンカウンター・グループの中に求められているだろうか。むしろ、大半の人々は「私化」あるいは感性の刹那的な満足に向かっているように見える。

筆者の経験によれば、日本のエンカウンター・グループに参加している人々は、個別化した中で不安な自己をかりうじて「私化」するまいとする、あるいは感性への埋没に逃避するまいとする良心的な人々ではないだろうか。そしてそのような人々が信頼と安心と自由と平等の「間柄」、即自的集団の中で、日常世界でのしがらみから一時、自由になり、体験過程 (Gendlin, E. T., 1961) を深化させてゆく中で「自己受容」するしないし「成長する」という現象が日本のエンカウンター・グループで生じているのではないかと考える。

また、即自性は、個別レベルにその影響がとどまるという限界を持っている。つまり、エンカウンター・グループは手段的側面を最小限にしか持たない「一回限り」「その場限り」の出会いの集団である。継続した



り拡大したりしていけば、エンカウンター・グループとしての特質である即自性は失われていく。そういう意味で、エンカウンター・グループそのものは、本来的に社会システムとして影響力は持ち得ないものであると考える。もちろん、エンカウンター・グループにおける自己受容体験や成長体験によって個人システムの硬化していた部分がゆるんで開いたシステムになり、日常生活において他者との関係（間柄）が改善されたり変化したりするという事は生じるだろう。しかし、そのような変化の波が「私」以上のレベルに及ぶ事が果たしてあるだろうか。

もちろん一人一人の参加者にとってはエンカウンター・グループは日常では得難い貴重な「間柄」の体験の場であり、ある人にとっては成長の場、ある人にとってはいやしの場でありうるだろう。ただ、アメリカで生まれたエンカウンター・グループを日本において行う時、その創始者 Rogers が描いたような独立した人間像や社会変革をそのまま期待するのは日本のエンカウンター・グループの現実にはあわないのではないかと考えるのである。

日本のエンカウンター・グループにおいては何が生じているのか、エンカウンター・グループが日本に渡来して四半世紀を経た今、その特徴について、もっと論議がなされてもよい時期なのではないかと考える。

## V、終わりに

「文明としてのイエ社会」の社会システム論の視点を用いて、日本のエンカウンター・グループを、即自的・無限定的・人為的集団であると再定義し、その集団としての特徴は即自性の希求にあると考えた。そして、集団主義社会である日本のエンカウンター・グループは即自的「間柄」の体験が目的となっているのではないかと論じた。

この試論においては、社会システム論の中の「個人」「集団」「主体」「即自的行為」などの概念をそのまま借用した。これらの概念の心理学的考察が今後の課題である。特に、この試論ではエンカウンター・グループにおいて個人に生じる体験過程の深化という現象と即自性の関係について詳しく論じる事ができなかった。エンカウンター・グループにおいて生じる現象についてより精緻な視点で理論化していく事が今後の課題である。

また、日本社会あるいは日本人特有の自我の在り方についても、今後、考察を深めてゆきたい。

## 引用文献

- 安部恒久 1982 エンカウンター・グループにおけるファシリテーターに関する研究 中村学園研究紀要 第15巻1号 pp.1-15
- Gendlin, E. T. 1961 Experiencing: A Variable in the Process of Therapeutic Change. American Journal of Psychotherapy Vol. 15, pp. 233-245 村瀬孝雄訳 1966 体験過程—治療による変化における一変数—「体験過程と心理療法」ナツメ社 pp.19-38
- Hassan, S. 1988 Combatting CULT MIND CONTROL. Park Street Press 浅見定雄訳 1993 「マインド・コントロールの恐怖」恒友出版
- 畠瀬直子 1977 ジェネラル・エンカウンター・グループ「エンカウンター・グループ」福村出版 pp.23-41
- 東山紘久 1992 「愛・孤独・出会い—エンカウンター・グループと集団技法—」福村出版
- 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎 1979 「文明としてのイエ社会」中央公論社
- 村山正治 1994 エンカウンター・グループを媒体としてコミュニティの創造と展開—福岡人間関係研究会25年の軌跡—九州大学教育学部紀要 第38巻第1号 pp.11-24
- 小柳晴生 1990 現代社会とエンカウンター・グループ—脱産業化社会による社会的意義説明の試み—心理臨床 第3巻第1号 pp.31-38 星和書店

- Persons, T. 1951 The Social System, The Free Press, 佐藤勉訳 1975 「社会体系論」 青木書店
- Powell, C. 1979 The induction of acute psychosis in a group setting. Canadian Journal of Psychiatry Vol.24 pp.237-241
- Rogers, C. 1970 Carl Rogers On Encounter Groups, Harper & Row 畠瀬稔・畠瀬直子訳 1973 「エンカウンター・グループ」 ダイヤモンド社
- Sale, I., Budtz-Olsen, I., Craig, G., and Kalucy, R. 1980 Acute psychosis precipitated by encounter group experience. The medical journal of Australia No.1 pp.157-158
- 下田節夫 1988 エンカウンター・グループの構造についてーリーダーシップの分散の実現を支えるものー 神奈川大学心理・教育研究論集 第6号 pp.46-64
- Sodaro, E. R. 1974 Screening of encounter group participants. American Journal of Psychiatry Vol.131 pp.929-930